

人間の生き方二態

人生は尊し、されどはかなし、とは よく耳にする言葉です。

この尊い、はかない人生の事実を厳しく受け止め、誤(あやま)りのない道を示すのが仏教であります。人間の生き方を大別(たいべつ)したいべつ)すると、

一、生き損(そこ)ねて生きる

二、本当に生きる

の二態(にたい)にわけることができます。

「生きそこね」とは、人生の尊さや世の中のありがたさに無関心で、盲目的(もうもくてき)、機械的に、いわゆる「酔生夢死(すいせいむし・何もせず)にぼんやりと一生をすごすこと」を続ける姿で、信仰のない生活であります。

「本当に生きる」ということは、如来の本願力にめざめ、阿弥陀さまのお救いに生かされる事実に基づき、いつでも、どこでも、お念仏の中に喜び、働く姿であり、信仰のある生活を呼ぶのであります。

「六道輪廻(ろくどうりんね)」ということばがあります。これは「生きそこね」の状態を六つにわけ、お釈迦さまが示されたものです。私たちの日々を当てはめてみると全くそのとおりです。

「六道」とは、

一、地獄一周圍や環境に支配されて、嫌々ながら働く姿

二、餓鬼一みたされぬ気持ちの中で、不平不満に明け暮れる生活

三、畜生一人生に何の感慨もなく、盲目的、機械的にその日その日を送る姿

四、修羅一互いに自己主張を譲らず、その為、角突き合いとなり、果ては血みどろの争いに巻き込まれていく姿

五、五欲一色欲・名誉欲・財産欲等の醜い欲望の奴隷となって、右往左往する状態

六、天一現状満足で、少しも進歩・研究・改善の努力もなく、足踏みを続ける姿の六つです。

「輪廻」とは、ぐるぐるめぐる状態で、私たちはいつもこの「生きそこね」の六道を繰り返しているのです。「生きそこね」(六道輪廻)から、本当に生きる生活への転換は、信仰のない人が信仰にめざめることによって達成されます。



月影のいたらぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ

(法然上人)

「月の光はあまねく、全ての人におよんでいます。この光のうけとめかたは、眺める人の気持ちの持ち方でいろいろいとかわる」というような意味です。

「自分は誰の世話にもなっていない」と考える人は、信仰にめざめた人といえるのです。私自身が一日生きる上には、時間的にも空間的にも、無量無限(むりようむげん)のおかげが必要です。

時間的には悠久(ゆうきゆう)の昔からつづく無量の先祖のおかげであり、空間的には天地間の限り知れない一縁一縁のつながりであります。生きるための一瞬一刻(いつしゅんいつこく)が、時空にわたる万縁(ばんえん)の護(まも)りのなかに、生かされている事実に基づかれます。

「私たちが生きている」のではなく、「生かされている」のです。

この無量無辺のおかげは、そのまま無量寿(むりようじゆ・時間的)、無量光(むりようこう・空間的)の阿弥陀如来そのものであります。

一息(ひといき)の空気にも、阿弥陀さまの本願力(ほんがんりき)を拝(おが)み、一滴の水にも、如来のお救いをいただき、私たちの血の一滴にも、仏の(本願の)生命を感じ、いつでも、どこでも、生かされる尊さ、ありがたさに気づくとき、そこにお念仏が繰り返され、おかげさまと喜び、ありがたく働かせていただき、法悦(ほうえつ・信仰によって得られる深いよろこび)にひたることができます。

この信仰の開眼(しんこうてきかいがん)の瞬間が、「生きそこね」を脱して「本当に生きる道」への転機であり、ここに光明にみちた念仏の白道(びやくどう・註参照)が展開するのであります。

【註】善導大師の『観経疏散善義(かんぎしょうしよさんぜんぎ)』に説かれる「二河白道(にがびやくどう)」の譬喩(ひゆ・たとえ)による言葉。群賊悪獣に追われる人が、西に向かって逃げてゆき、

水と火に挟まれた幅の狭い白道に出会い、東岸からは白道を進めと言われ(お釈迦さまから)、西岸からは弥陀如来から白道を渡り来たと招かれ、決心して白道を渡って西岸(彼岸)に至り、浄土に往生することを示す図会。二河白道図会の詳細は後述します。